

学園だより

Vol.
185

I 特集 施設紹介

	COC推進室	02
	保健学研究科	06
	[付録] キャンパスツアー	10
II	弘前大学総合文化祭	14
III	研究室紹介	16
IV	新任教員自己紹介	19
V	海外だより	20
VI	けいじばんコーナー	22
VII	編集後記	26

C O C 推進室

「地域発展の核となる大学づくり」を目指す



本学のCOC事業に関する企画立案や実行について議論するCOC推進室員



C O C 推進室 室長

吉澤 篤
弘前大学 理事
(企画担当)

1. ごあいさつ

弘前大学は、平成26年度から5年間にわたる、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」に採択されました。本学の事業名は「青森ブランドの価値を創る地域人財の育成」です。本事業を中心に、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献にわたる多様な取組を展開してまいります。

本事業では、青森県、弘前市はじめ行政各部署、県内の経済団体や企業関係者、NPOなどと協働し、ご理解とご協力を得ながら、地域を志向したカリキュラム改革、地域課題にかかわる重点研究の推進、地域人材育成のための教育プログラム開発など、地域の課題と大学の資源をつなげ、全学的に地域再生・活性化に取り組めます。

本学が青森県の「地（知）の拠点」となるべく、新しい領域やテーマにも果敢にチャレンジしてまいりますので、皆さまのご支援とご協力をお願い申し上げます。

2. COC事業とは

“COC”とは、“Center of Community”の略で、大学が自治体を中心に地域社会と連携して全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めたり、様々な地域課題の解決に必要な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的な存在【地(知)の拠点=COC】となることを目的として、文部科学省が全国公私立大学等を対象に支援している事業です。

平成25年度・26年度の2年間で、全国の各大学等から計556件の申請があり、うち77件の事業が採択されています。

弘前大学は平成26年度の公募にあたり、「青森ブランドの価値を創る地域人財の育成」をテーマ・内容とした事業を申請し、採択されました。

現在、弘前大学が位置する青森県は、人口減少など多種多様な地域課題を抱えています。

「青森ブランドの価値を創る地域人財の育成」は、それら地域課題の克服に向け、青森を愛する気持ちを礎として新しい未来を切り開き、青森県

の産業・生活・社会システムに新たな価値を創造できる「青森ブランド地域先導人財」を育成することを目的としています。

本事業では、「青森ブランド」価値の創造を目指す青森県、「笑顔ひろさき」プロジェクトを進める弘前市、青森県内の経済団体や企業関係者、NPOなど県民・市民の皆さまとの、机上ではない実践的なネットワークを整備し、育成する人財像、教育内容等への地域ニーズの反映、自治体職員・地域人財の教育参画等を得て、地域志向教育を実践します。また、本学の教育・研究・社会貢献の各事業が一体となって地域を志向し、地域の課題解決に挑み、地域再生・地域活性化の実現に貢献します。

本事業の事業期間は平成26年度から5年間であり、平成28年度から実施する学部改組と合わせて、本学が目指す「地域発展の核となる大学づくり」の中核となる事業です。

■弘前大学COC事業概要

平成26年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組 地(知)の拠点

大学等名：国立大学法人弘前大学（連携自治体：青森県、弘前市）
事業名：青森ブランドの価値を創る地域人財の育成

人口減少等の課題を克服し、「青森ブランド」価値の創造を目指す青森県、弘前市と協働し、大学が一体となり、青森を愛する気持ちを礎として新しい未来を切り開き、地域の産業・生活・社会システムに新たな価値を創造できる「青森ブランド地域先導人財」を育成する。

地域課題

【青森県基本計画「未来を変える挑戦」】
 アグリ(農林水産業)・ライフ(医療・健康・福祉産業)・グリーン(環境・エネルギー産業)ごとに政策・施策を設定し、以下の分野横断的な戦略プロジェクトに取り組む。

1. 人口減少克服プロジェクト
子育て支援、雇用創出・拡大、安全で快適な生活環境、観光・交流人口増
2. 健康長寿県プロジェクト
自然・食環境の活用、生活習慣の改善、適切な治療、スポーツ
3. 食でとこよぶプロジェクト
県内産品の多角的な価値創出、食の価値を高める、外貨獲得・域内循環

【弘前市アクションプラン2013】
 超少子高齢化社会を見据え、以下の最重要課題等を設定した。

1. 子育て(人づくり)
2. 健康
3. 雪対策(安全安心)
4. 市民参加型社会の実現

弘前大学における取組

教育

- 文理融合型/地域特定課題を解決できる人財育成
 - > 地域「実践力」を育成する初年次教養教育
 - ✓地域を対象とした課題解決型学習や科目群「ローカル科目」の必修化
 - > 入学から卒業までの「地域を志向したキャリア教育」
 - > 「専門知」と「地域の課題」を交差させる「専門力」を育成
 - ✓文理融合型人財育成のため科目群「学部越境型地域志向科目」を新設・必修化
 - ✓地域特定プロジェクト志向専門人財育成のための教育プログラムの開発と本学独自の称号の付与
- 教育の質の保証
 - > ルーブリック(評価基準)とe-ポートフォリオ(学修のふりかえり)を活用した学生自身のPDCAサイクルの確立

研究

- 学内競争的資金における人財育成「地域研究型」の新設
- 文理融合的な地域志向の多領域共同研究による「青森ブランド価値創造研究」の実施
- 産官学の対話型ワークショップによるイノベーション創出

社会貢献

- 産官学を結ぶPDCAエンジンの構築
- ライフステージに応じた学習機会の提供/履修証明制度による系統的な公開講座の実施

【事業の成果目標】

	26年度		30年度(目標値)	
	26年度	30年度(目標値)	26年度	30年度(目標値)
教育	地域志向科目数	91科目	200科目	
	地域志向科目履修者数	3,856人	15,000人	
	地域課題をテーマとした卒業論文数	66編	120編	
	県内就職希望率	36.8%	50%	
研究	共同出願特許件数	5件	30件	
	ベンチャー創出件数	1件	6件	
	社会人等の教育機会の開講数	16件	50件	
	上記の受講者数	1,457人	6,000人	
社会貢献	産官学の対話型ワークショップによるイノベーション創出	211人	612人	

※地域志向科目とは本事業の目的に沿った人財育成のための授業科目

【期待される学内外・地域社会等への波及効果】

- (学内)学長のリーダーシップによる大学改革の実現
- (学外)青森地域の産官学民の連携強化
- (地域社会)産業発展等による地域活性化、住民が健康で暮らしやすい地域づくりの実現

3. 弘前大学の取組み

弘前大学は、地域活性化の中核的拠点としての機能強化を図るため、学長の強力なリーダーシップの下で一丸となり、地域を志向する大学として必要な改革を進める「弘前大学COC推進本部」を平成26年11月に設置しました。

また、本学のCOC事業の実施に関する各種提言や評価を行うために、学長、理事、青森県知事、弘前市長、青森県内の企業関係団体の長やNPO法人代表者らによって構成される「青森地域COC推進協議会」を設置し、平成26年12月に開催された第一回目の協議会において、佐藤学長による『「地域志向」大学改革宣言（学長宣言）』が読み上げられました。

本体制のもと、「青森に関する学修の充実」、「教育の質を保证する学生自身の評価サイクルの確立」、「文理を融合した青森ブランド価値創造研究」、「地域課題解決のための多様なプログラムの開発・提供」、「地域の人々と学生が協働する社会参画の仕組みの構築」など、本学の教育・研究・社会貢献の各事業が一体となった様々な取組みを行っています。

4. 地域志向型人財を育成

地域志向型人財＝青森ブランド地域先導人財とは、グローバルな視野を持ちながらも地域に対する愛着、地域を創造する意欲を持ち、地域課題に文理の枠を越えて総合的にアプローチでき、獲得した専門知を活用して、地域の課題解決を主導できる人財です。

そこで、本学の学生に、青森県に関する知識や



佐藤学長と三村青森県知事、葛西弘前市長が握手を交わす



課題解決型学修の様子（地域交流人口増加プロジェクト）



佐藤学長と弘前大学生が並ぶ、COC 事業広報用ポスター

関心を高めてもらうため、青森を対象とした「地域学ゼミナール」や、青森の歴史・文化・特色を学ぶ「ローカル科目」の開講、附属図書館に「青森に関する書籍の紹介コーナー」の設置、佐藤学長と本学学生が並ぶCOC事業広報用ポスターの掲示などを行っています。



附属図書館に「青森に関する書籍の紹介コーナー」を設置

5. COC推進室の役割

「COC推進室」は、本学のCOC事業の実施及び連絡調整、事業に必要な業務を行うため、平成26年11月に設置されました。

COC推進室は理事（企画担当）を室長とし、副理事、教員、学務部長、各担当課長らによって構成され、本学のCOC事業に関する企画立案や実行を担当します。

平成27年3月には、COC推進室専任教員として、西村君平助教と野口拓郎助教が着任し、西村助教は教育カリキュラムや評価基準（ループブック）の開発、野口助教は地域人財活用のコーディネート等を主に担当しています。



西村 君平 COC推進室 助教



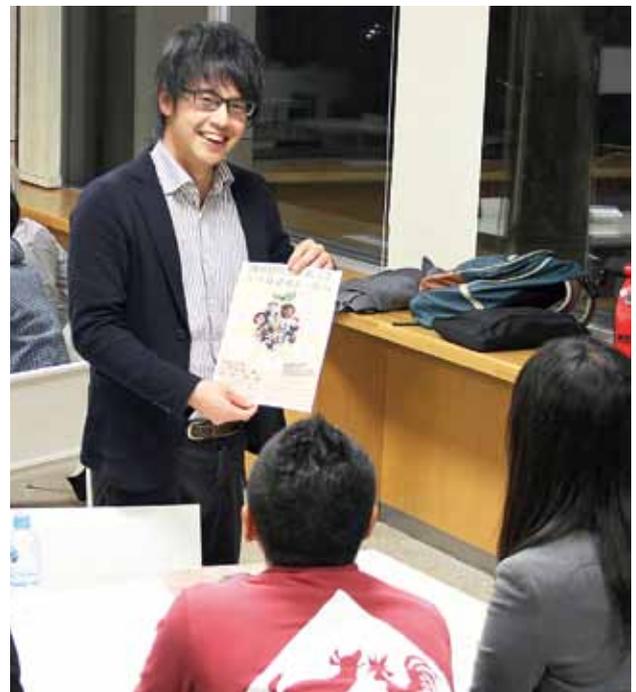
野口 拓郎 COC推進室 助教

COC推進室は総合教育棟1階「自学・自修室」の向かいにあり、COC事業に関する様々な打合せや会議が行われるほか、学生から本学と地域との連携に関する様々な意見を聞く窓口の役割を果たしています。

また本学は、COC事業をさらに発展させた、平成27年度文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」にも選定されており、本学が「地域活性化の中核的拠点」となるために、COC推進室のさらなる活躍が期待されます。



学生に地域志向型人財や地域連携について説明する西村助教と野口助教



本学COC事業の詳細は弘前大学COC事業ウェブサイトをご覧ください。

<http://coc.hirosaki-u.ac.jp>

弘前大学COC事業

検索





保健学研究科

Graduate School of Health Sciences



保健学研究科長 木田 和幸

平成27年9月29日、保健学研究科では、増築棟新営工事及び既設棟改修工事が竣工し、長期にわたる整備工事を終えたことを記念して竣工記念式典を開催しました。



竣工記念式典におけるテープカット

保健学研究科の増築棟新営工事及び既設棟改修工事は、Ⅰ期工事が平成25年2月から開始され、ひきつづきⅡ期工事、Ⅲ期工事が行われ、2年半を超える期間にわたる改修となりました。またⅠ期改修工事とともに総合研究棟F棟が新営され、被ばく医療総合研究所が配置されました。

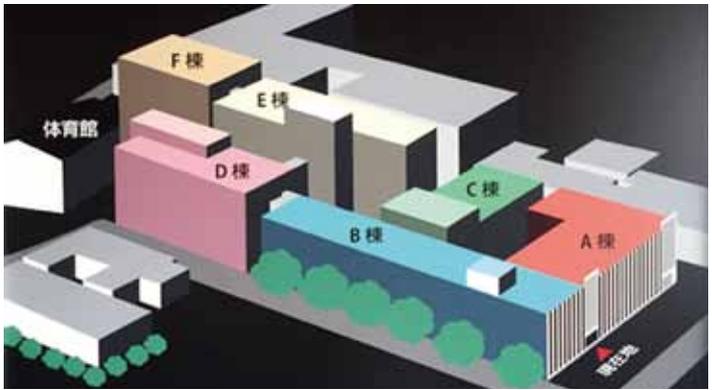
竣工建物は、新営及び改修により総面積が増加し、大学院の講義室、研究室、被ばく医療関係の研修室や演習室等が整備され、学部学生、大学院生、教職員にとって、より一層の効果的な講義、実習、研究が展開できるものと期待しています。

以下に整備された施設等の概要をご紹介します。

1. 正面入口・ピロティ

長期にわたる改修工事は、保健学研究科の顔となるファサードの整備をもって、すべての環境改善が完了しました。

A B C棟に囲まれた中庭や看護師宿舍との間にある市道側通路にインターロッキングブロック舗装を配して景観の改善を行うとともに、迷路のように複雑な校舎を案内するため、電光案内板を設置して、来客者の利便性が高まるように配慮しました。



2. F棟【第Ⅰ期工事…総合研究棟（新営）】

F棟は、本学における緊急被ばく医療体制づくりを中心とした教育研究活動の成果を結集し、福島原発事故で顕在化した、我が国の原子力政策バックアップ体制の弱点強化を図ることを目的と

して、教育研究環境及び大学院・被ばく医療研究充実のための施設整備を行いました。

また、リフレッシュスペースを設けて、学生・教職員のアメニティ向上を図っています。



■ 1F 大学院講義室



■ 1F リフレッシュスペース

3. D棟【第Ⅰ期工事…総合研究棟（改修）】

D棟は、昭和56年に建設され築後31年を経過しているため、経年による老朽化が著しく、また保健学系学生の教育研究活動に対する機能低下が

著しく、さらに耐震性能が低いことから、これらの改善を図ることを目的として全面改修及び耐震補強を行いました。



■ 3F 医療化学準備室



■ 3F 医療化学実験室

4. B棟の一部及びC棟【第Ⅱ期工事…保健学科（改修）】

第Ⅱ期工事は、4年制保健学科への改組及び大学院の設置、被ばく医療教育の実施など、組織や教育研究内容の拡大に対応した施設機能の整備不足や狭隘化が進行し、学部教育に支障をきたして

いたため、既存の施設の点検を行い、機能の集約化・共有化を図り、学部教育環境の改善及び大学院・被ばく医療教育充実のための施設整備を行いました。



■ B棟 3F 看護臨床実習室



■ C棟 1F 学部学生演習室

5. A棟及びB棟の一部【第Ⅲ期工事…総合研究棟改修Ⅲ（保健学系）】

第Ⅲ期工事は、4年制保健学科への改組及び大学院の設置、被ばく医療教育の実施など、教育研究の拡充に対応した機能改善を実施し、学部教育を充実するために既存施設の点検を行い、機能の

集約化・共有化を図り、教育研究環境の改善及び大学院・被ばく医療教育充実のための施設の設置を行いました。



■ A棟1F 誘導サイン



■ A棟1F 事務室



■ A棟2F 大会議室



■ B棟3F 講義室

6. おわりに

保健学研究科は、2年半の長期にわたる整備により、耐震補強に加えて講義室・研究室のほか共同利用スペースや交流スペースなどが確保され、「柔軟かつ効率的な施設利用の実現」と「教育研究のアクティビティの向上」が図られました。

第Ⅰ期改修の開始から本来の形で講義や実習を受けることができなかった学生や、永きにわたり研究室の仮住まいをした教員や事務職員がおりますが、数十年に一度の大改修ということで、この機会に遭遇できたのは幸運と思って竣工を待ちわ

びておりました。全ての改修、新営が終了した姿は、やはり素晴らしい建物に変身したと思っております。

最後になりましたが、増築棟新営工事及び既設棟改修工事にあたっては、多くの学内関係者のご支援とご理解を賜りました。また、工事関係者のご協力により竣工に至っております。

ここに改めて感謝を申し上げますとともに、今後とも保健学研究科の発展により一層のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



キャンパスツアーとは

地域貢献の一環として広く弘前大学を理解していただくことを目的として、希望者に対し文京町キャンパス内の各施設を紹介する企画です。

キャンパスツアーのコース

- ① 創立50周年記念会館 ② 保健管理センター ③ 旧制弘高生青春の像 ④ 附属図書館 ⑤ 教育学部
- ⑥ 資料館 ⑦ 体育施設（第一体育館、武道館、第二体育館、弓道場）
- ⑧ 理工学部（1号館、2号館） ⑨ 農学生命科学部 ⑩ 創立60周年記念会館 コラボ弘大
- ⑪ 総合情報処理センター、理工学研究科附属地震火山観測所
- ⑫ 大学会館（学生食堂、弘前大学生生活協同組合） ⑬ 人文学部 ⑭ 総合教育棟
- ⑮ 旧制官立弘前高等学校外国人教師館

所要時間はおよそ1時間30分です。

① 弘前大学創立50周年記念会館



弘前大学は昭和24年に設立されましたが、この建物は創立50周年を記念して、卒業生・地域の皆様・父兄の皆様などからご寄附をいただき、記念事業の一つとして平成11年9月に建てられました。

この施設は、弘前大学の「開かれた大学」づくりの一翼を担い、大学の活性化を促進するための多目的ホールとして、また弘前大学の歴史を伝える場、卒業生等の交流の場として、大学関係者だけでなく、地域の方々にも気軽に親しみご利用いただける施設となっております。学会・研究会等学術研究の交流、公開講座等や学生の文化活動などにも使用しています。

② 保健管理センター

昭和42年に設置され、昭和53年に新築されました。

学生、附属学校生徒、教職員などおよそ1万名の健康診断、健康管理（メンタルヘルス）、応急処置等を行っています。

職員は、医師、専任カウンセラー、看護師、ほかに非常勤職員が勤務しております。



③旧制弘高生青春の像



この像は旧制弘前高等学校創立70周年を記念して、平成元年に卒業生により建てられました。

弘前高校は大正9年に、官立第16高等学校として設置され

ましたが、新制大学の発足に伴い、昭和25年に閉校となりました。

(青春之像の右側の) 名簿碑は平成12年に建てられ、在校生5,325名の名簿が刻まれています。

作家 太宰治 (本名 津島修治) 昭和2年入学 7期生
映画監督 鈴木清純 昭和18年入学 23期生
元NHKアナウンサー 鈴木健二 昭和20年入学 25期生

初登頂の碑

弘前大学山岳部がヒマラヤの山々を世界初登頂したことを記念し、平成16年10月に建てられました。



⑦文京町地区体育施設

文京キャンパス内の体育施設です。学生の正課授業・体育系部活動で使用しています。

1) 第一体育館

昭和43年に建てられ、部分的な修理工事を重ねながら使用されており、主にバスケットボール、バレーボールなどの球技で使用しています。

2) 弓道場

昭和45年に建てられていますが、平成13年に弓道部の卒業生のご遺族の方からご遺志による寄附をいただき改築、その後平成24年には的場の改築をしています。

3) 合宿所

昭和43年に建てられ、当初は「保健管理センター」として使用していましたが、保健管理センターが新築移転したため、現在は学生の課外活動施設として使用しています。

体育系サークルの合宿のほか、文系の演劇サークルの「立ち稽古」、「舞台装置づくり」などにも使用しています。

4) 第二体育館

平成5年に建てられ、主に器械体操などで使用されています。建物の形容は屋根は「岩木山」、窓は「こけし」を表現しています。

5) 武道場

昭和47年に建てられ、柔道、剣道、合気道、空手道などで使用しています。

6) 多目的広場

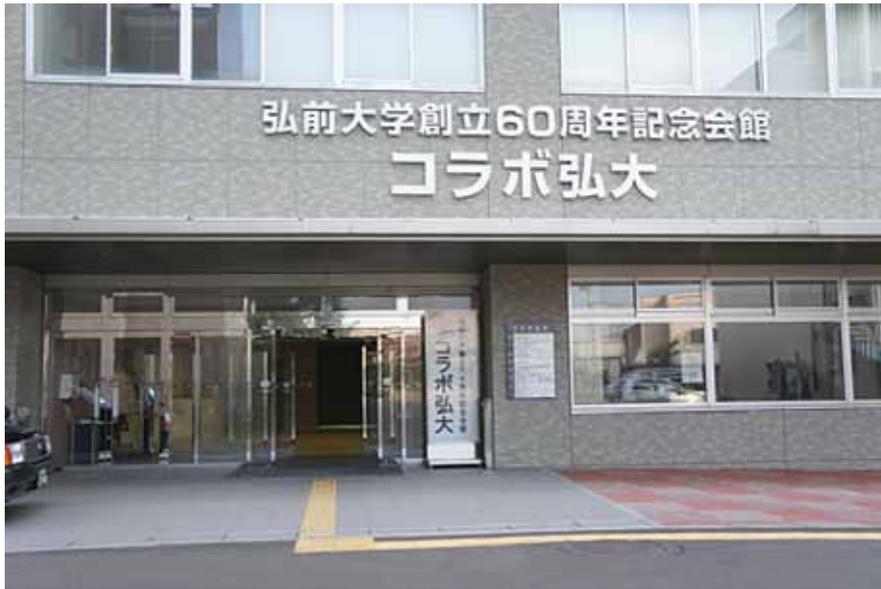
平成16年に整備され、体育の授業や部活動で使用しています。そのほかの運動場は、学園町に総合運動場として整備しています。

7) サークル共用施設

「多目的広場」の奥にあるプレハブの建物は学生サークル棟で、平成16年5月に3棟、平成23年にもう1棟が設置され、現在4棟となっております。

サークルの数が100を超えるため、部室はまだ不足している状況です。





⑩弘前大学創立60周年 記念会館 コラボ弘大

弘前大学の創立60周年を記念して、平成21年6月に完成しました。

この建物には、大学の研究部門を担当する研究推進部（図書館部門を除く）、大学院地域社会研究科、生涯学習教育センター、放送大学などが入っています。



1階エントランスホール

金作品「幸せのリング」

イルカをモチーフにした作品が有名な東京芸術大学学長 宮田 亮平先生（東京五輪2020エンブレム委員会委員長）が、弘前大学創立60周年を記念しイルカ60頭の作品を制作されました。

なお、宮田先生は東京駅の待ち合わせ場所で有名な「銀の鈴」4代目を制作した方です。



アースビジョン

直径1.5mの大型地球スクリーンです。タッチパネルやトラックボールを操作することにより、コンテンツの選択や映像の拡大・縮小、360度自由な視点から地球を見ることができます。





⑮旧制官立弘前高等学校 外国人教師館

この教師館は大正14年、旧制弘前高等学校の外国人宿舎として弘前市富野町に建てられた西洋風建築物で、長年弘前大学職員宿舎として利用されてきました。

平成16年、県の都市計画街路事業のため取り壊しの危機にあったところを、弘前大学同窓会及び本学教員有志を中心とした保存のための募金活動が行われ、移築・復元されたものです。

明治時代弘前市の西洋風建築物（旧第五十九銀行本店や旧弘前市立図書館）を建築した名棟梁 堀江佐吉の直弟子 川元重次郎が建築したもので、弘前市としても大正時代の希少な建物です。

平成17年7月、国の登録有形文化財（建造物）に登録されました。青森県内では28例目になります。

平成24年10月、弘前市から景観重要建造物の指定を受けました。



太宰治文学碑

太宰治は、本学の前身校の一つである旧制弘前高等学校の卒業生で、平成21年（太宰生誕100年）に本学の60周年記念事業として文学碑を建立しました。

文学碑の隣には、太宰の旧制高校時代の写真があります。この写真が附属図書館から発見され、全国的に話題となりました。



弘前大学総合文化祭

SHOUT





今年の総合文化祭は15回目を迎え、10月16日（金）から18日（日）にかけて開催されました。今年は直前まで風や雨の強い日が続き、開催に不安が募るばかりでしたが、総合文化祭当日は天候に恵まれ、イベントも滞りなく進み、大きな問題やトラブルが起きることなく弘前大学総合文化祭の3日間に幕を下ろすことができました。快晴ということもあり、この3日間の来場者数はおよそ9,500人と、弘前市内で他にもイベントが開催されていたのにも関わらず、昨年度と変わらない来場者数を迎えることができました。

さて、これほどまでに多くの方に来場していただいた今年の総合文化祭は、一般応募の中から選ばれた「SHOUT」というテーマのもと行われました。

この「SHOUT」というテーマには、弘前大学の学生や教職員だけでなく、地域の方々とも声を掛け合い、よりよい弘大祭を共に作り上げていきたいという想いが込められています。

総合文化祭当日の3日間だけでなく、前日の準備や後片付けにおいても学生や教職員、近隣住民の方々のご協力をいただき円滑に行うことができました。皆様のご理解・ご協力があったからこそ無事終えることができたのだと考えております。私達学祭本部実行委員会としては、総合文化祭に関わった1人でも多くの方々に満足していただけたのであれば幸いです。

これらの想いが込められたテーマのもと開催された総合文化祭は、「Opening Festival」で1日目が始まり、2日目の芸能人招致イベントやよさこいイベントなど多くの方に来ていただき、3日目の締めである「Final Festival」と花火まで、たいへん多くの方に楽しんでいただけたのではないかと思います。その中でも昨年に引き続き開催された「ミスター&ミス弘大コンテスト2015」は、今年で3回目とまだ歴史も浅く、不安もあったのですが、多くの方に投票していただい

たことで1・2回目よりも多くの投票数となりました。総合文化祭の最後のイベントである「Final Festival」内で行われた結果発表においても多くの方に参加していただき、弘前大学の文化祭を代表するイベントの1つになったのではないかと思います。昨年度は新しいイベントとして「弘前大学ドッジボール大会」が行われましたが、今年度は新しいイベントとして「イントロQ!!」が行われました。毎年新しいイベントが実施される総合文化祭を来年度以降もご期待ください。また、「Opening Festival」「Final Festival」での挨拶や「激闘！カラオケ選手権 2015」の審査員として佐藤学長にもイベントにご協力していただき、大いに盛り上がりを見せることができましたと思います。

今年のテーマである「SHOUT」のとおり、弘前大学の文化祭の主役である学生を始めとして、教職員や地域の方々など数多くの方たちの声の掛け合いがあったからこそ、弘前大学だけの総合文化祭を創りあげていくことができたのではないかと考えております。

私自身、文化祭当日中は総合案内所におり、ステージにて様々な発表を披露する各部活・サークルや団体の方々、案内所にお越しいただいた来場者の方々、当日中も文化祭内の見回り等をしてくださっていた職員の方々の姿を見ながら、多くの人によってささえられながらこの総合文化祭が形作られているのだと心から感じました。

最後に繰り返しとなりますが、今年の弘前大学総合文化祭を開催するにあたり、本学の教職員や学生、地域の方々、企業の方々、出店の諸団体など数えきれないほど多くの方々にご協力いただきました。ありがとうございました。これらの方々のご協力があり、私たち学祭本部実行委員会は総合文化祭の開催・運営に向けて、集中することができました。学祭本部員を代表して心より厚く御礼申し上げます。

学祭本部実行委員会委員長 新谷紀明



各研究室をクローズアップ!

教育学部音楽教育講座 今田匡彦研究室

(大学院教育学研究科 地域社会研究科)



現在この研究室には、大学院地域社会研究科（博士課程）院生5名、大学院教育学研究科院生5名、学部学生19名が所属し、音楽教育学という分野の研究に取り組んでいます。

たとえば、日本語での生活空間で「音楽」ということばを知らないヒトはいないでしょう。私たちが生まれ落ちたときから、「音楽」と命名されている事象が、さまざまな接頭語（クラシック、ポピュラーなど）を伴って散乱しているからです。この研究室は、「音楽」と命名される以前の音楽、或いはオンガクがなんであったのかを、共時的、実践的に探っていくことをそのメインの課題としています。

あまりにも当たり前のコトなので普段は考えもしないのですが、ヒトが生まれる遙か以前から音は存在していました。動物の鳴き声、波、風、木々のざわめきなどのサウンドスケープを巧みに模倣することで、ヒトは音楽とことば（舌の舞踊）の誕生という2つの奇蹟に立ち会うことができたの

です。音楽は単なる〈鳴り響く空気〉の連なりなのですが、ある土地では創り手と役割が分かれていたり、単一の倍音同士の重なり合いにこだわったりします。別の土地では自然音に近い複雑な倍音を、周囲の音と一緒に聞いたり、たった一つの音の複雑性を大切にしたり、創り手と聴き手の区別がなかったりもします。また別の土地では、だれにも聞かせることなく、単に暇つぶしで音を出したりもするようです。

日本に暮らす私たちが通常「音楽」と考えているのは、〈大きな音楽〉です。かつてヨーロッパから輸入された〈大きな音楽〉は、大きな物語を〈表現〉するために、交響曲、オペラなどに化け、長時間人々の耳を拘束したりします。作曲し演奏する側も、過剰な訓練が必要となります。その弊害も大きく、〈大きな音楽〉はプロフェッショナルとアマチュア、生産者と消費者、勝者と敗者（たとえばコンクール）など、さまざまな二項対立を生み出してしまいます。特に19世紀以降「音楽」は金融と深

く結び付き、商品化されてきました。その要因は、市民革命以降の王侯貴族から出版社へのスポンサーシップの移行にあったりもします (Attali 1985)。サイド(Said 1991)は、ドレスや燕尾服に身を包んだ専門家と〈劣等〉なアマチュアとの格差を指摘します。今日の学校音楽も〈大きな音楽〉のミニチュアです。吹奏楽、合唱、鑑賞教材など、どんなに規模が小さい活動であっても、〈大きな音楽〉は植民地支配的に機能します。シェーファー (Schafer 1995) は、西洋の交響楽団を19世紀ヨーロッパの覇権の象徴と考えます。金、銀、コクタン、象牙、グラナディラウッド、ローズウッドなどの楽器に使用される素材が植民地から搾取したものであるからです。

音楽科教育研究室では、この〈大きな音楽〉からの脱植民地化を具体的に考察、実践しています。〈大きな音楽〉を情報として相対化しつつ、現代音楽のさまざまな手法を取り入れ、音楽が大きくなる以前、まだ小さく透明だった頃の肌理、コト的に機能する小さな音楽をこどもたちが創り出すためのメソッドの開発が研究の中心となっています。サウンドスケープという概念の下、誰とも話さず独りになって環境の音を聴くエクササイズ〈サウンドウォーク〉、身近な素材である紙や声を使った音楽創作や即興演奏、ボディーマッピングを基盤とする身体表現、などなど小さな音楽の可能性は広がります。

消費の欲望と深く結びついた〈大きな音楽〉は、とても魅力的ですが、アマチュアは訓練された専門家による超絶技巧を、指を銜えて見守るしかなくなってしまう

す。再生技術の誕生以降は、クラシックに代わりポピュラー音楽が〈大きな音楽〉の地位を獲得しました。アマチュアは口煩い消費者として移ろいやすい自らの趣向に従ってお気に入りの〈大きな音楽〉をブラウズしているようですが、自らの好みに忠実であるかに見えるリスナーたちが、巧妙に仕組まれ分業化された専門のプロデューサーたちの掌中にあることも忘れてはいけません。これら大きな音楽、及びそのミニチュアから無意識に排除され、忘れられてしまったのは、音楽に最も必要なはずのcreativityとcommunicationです。学校



国際学会での院生による研究発表 (The2015 APSMER,HongKong)

に音楽の授業がなくても、日本からポップ・ミュージシャンが消えることはありません。学校で文部省唱歌を歌わなくても、日本は一定数、一定水準のクラシック演奏家を生産します。生産力の裏付けとなるのは公教育ではなく、その外側の文化資本だからです。前述のように〈大きな音楽〉は二項対立によって成立しています。二項対立とは即ち〈価値〉という概念によって支えられます。〈価値〉は本質的な価値があるようで、実は既成概念にお伺いを立てることです。お伺いの先は、当然〈既に出来上がった〉モノ、様式化された括弧付「文化」、

ということになります（本来の文化は今ここになく気がついたら生まれているような現象です）。故にここでの「音楽」はモノ的に機能します。音楽を二項対立から解放しコト的に機能させるために音楽教育が必要となります。それは既成の価値体系に承認された〈大きな音楽〉の専門性に魅せられ、身体を酷使して一生奉仕しようと誓うことではありません。人間が生まれる前からそこにあったサウンドスケープに小さな耳を傾け、音響空間に木霊を返すように身体を使い、声を出し、身近な道具を使う。〈大きな音楽〉を出来うる限りクールな眼差しで相対化し、サプリメントとして飼いつづける。そのようにして自らの音楽、小さな音楽を少しずつ創っていく。それが何時しか様式となり、文化となる。このような音楽を創り出せるのは音楽教育という沃野だけ、かもしれません。

引用・参考文献

- Attali, J. (1985) Noise: The Political Economy of Music. Minneapolis: University of Minnesota Press.
Said, E.W. (1991) Musical Elaborations. New York: Columbia University Press
Schafer, R.M. (1995) R. Murray Schafer: Suntory Hall International Program for Music Composition No.20. Tokyo: Suntory Hall



ゼミコンサート（2015年2月14日弘前大学創立50周年記念会館みちのくホール）より〈紙のパフォーマンス〉

新任教員自己紹介



自然科学系 農学・生命科学領域 助教
専任担当：農学生命科学部

平成27年7月1日付けで着任いたしました、曾我部篤と申します。これまで海に生息する魚類を主な研究対象として、行動や生態、進化を研究してきましたが、弘前大学に赴任してからは、湖や河川など青森の豊かで多様な淡水

そがべ あつし

曾我部 篤

域での研究もはじめています。学生みなさんには授業や研究をとおして、青森県の魅力的なフィールドとそこにすむ生き物の多様な生き様を体験的に学んでもらいたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



自然科学系 農学・生命科学領域 助教
専任担当：農学生命科学部

平成27年10月1日付けで、農学生命科学部地域環境工学科の助教に着任しました。着任前には京都大学防災研究所にて、主に長期的な地形発達といった視点から、崩壊予測の精度向上などに取り組んできました。これは、山地

ツオウ

郜

チンイン

青穎

災害の予測、土砂災害防災対策および環境保全について考える貴重な機会でした。今後は山間地環境における課題の解決のために、研究・教育・社会貢献を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。



人文社会・教育学系 社会科学領域 助教
専任担当：教育推進機構アドミッションセンター

平成27年10月1日付けで教育推進機構アドミッションセンターに着任いたしました。

専門は高等教育論で、高大接続や遠隔教育、大学経営などを主に研究して

こぐれ

小暮

かつや

克哉

おります。

まだまだ未熟者ではありますが、弘前大学のさらなる発展に貢献できるよう、全力で取り組んでまいります。よろしくお願い致します。



人文社会・教育学系 人文科学領域 講師
専任担当：教育推進機構教養教育開発実践センター

平成27年11月1日付けで教育推進機構教養教育開発実践センターに着任いたしました立田夏子と申します。来年度から教養教育英語科目を担当いたします。英語が嫌いな人は少しでも英語が好きになり、英語が好きなのは更に

たつた

立田

なつこ

夏子

英語が好きになるような、「楽しくて、分かりやすい」英語の授業を目指します。弘前大学の教養英語教育が、より高い教育効果を発揮できるよう、日々尽力いたします。何卒よろしくお願い申し上げます。



COI 研究推進機構 助教

平成27年11月1日付けでCOI研究推進機構のURA（リサーチアドミニストレーター）として着任しました川谷健一と申します。大学時代に物理を専攻し、特許事務所での勤務を経て、この度弘前大学にて勤務させていただく

かわたに

川谷

けんいち

健一

ことになりました。新潟、福井、大阪、東京と各地を回ってきましたが、青森に住むのは初めてとなります。短命県返上に向けて精一杯取り組みたいと思っておりますので、どうかよろしくお願い致します。



青天の弘前

人文学部経済経営課程 1年 周^{チュウ} 叔董^{シュットン}

出身国：マレーシア



弘前大学での留学生活は大変充実している。私は2015年4月に入学して、今まで弘前で半年ほどの留学生活を過ごした。この半年での生活が東京にいる1年半の生活より充実していた。自分の人生履歴で弘前大学に留学したことが光栄である。

入学したばかりの時に、大学の生活を何も知らずに色々な手続きが大変だった。その時、生協という学生を応援する組織の手伝いの上で、部屋を探したり、家具を買ったり、様々なサービスしてもらって、助かった。その後、単位登録のことにも、先生と先輩からアドバイス

していただいて、スケジュールも自分なりに組み合わせられた。そして、スケジュールを埋めた後、学業以外色々な活動に活躍した。その時に、大学にある掲示板で様々なイベントを探したり、サークルに入ったりすることができた。また、弘前大学は地域との繋がりが深いので、色々な地域と関係ある授業、イベント、ボランティア活動に参加して、大変面白かった。たとえば、りんご産業と管理会計の講義で、青森のりんご産業の状況を知って、農家の悩みと方針も理解できて、非常に貴重な経験であった。弘前大学を通じてなければ、こういう状況を知るにはなかなか難しい。スポーツ的な活動では二つ参加した。私は山が好きだから、山岳部に入った。体験登山で寒くて辛くても、山の景色が私の心を癒した。その山行で自分の体力の不足を痛感して、ほぼ毎日体を鍛えている。それから、この自然が溢れた弘前で



私はほぼ毎週土日山と沢へ行ったり、登ったりしている。夏合宿に向けて、11階建ての理工学棟で階段上りの重量訓練をしていた。毎日

夕方、カナダの友人と一緒に学校の無料のトレーニング室で、筋トレや英会話などもできた。彼から色々なトレーニングのやり方を教えてもらって、私も彼にマレーシアの面白いことを教えてあげた。

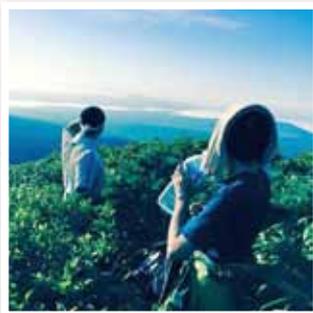
以前の日本語学校で茶道を1年間やっていたから、お茶碗に興味があって、陶芸部にも入った。陶芸部で初めて自分の茶碗を作り、土を練り、色を塗り、発想力や創造力を作り出す活動であった。

夏になったら、弘前にはねふた祭りがあり、よさこいという舞踏があり、町に愉快的気分が溢



れてきた。青森市へねふた祭りに参加して、「らせららせら」と叫びながら、踊って、疲れたが、満喫した。ボランティア活動でりんご園へ行った。りんご園の方々が津軽弁という言葉で会話をしている、初めて津軽弁を体験し、これはこの地域の文化の魂だと感じた。

半年だけの弘前大学の留学生活がこのように充実できるとは思わなかった。これからも精一杯粘り強く頑張っていて、入学した時の目標を達成して、満面の笑顔をもって立派な社会人になりたい。





日本に留学して

人文社会科学部 2年 金 春海

出身国：中華人民共和国

私は中国吉林省の延辺大学の日本語教育学科を卒業し、その後大連のIBM株式会社に勤めました。そんな私がなぜ日本にやってきたのかと今でもよく周りの方に聞かれます。その理由は、会社に勤めていた時、日本人のお客様向けに、サービスを提供しておりましたが、そのとき日本人から「中国人は日本語ができて日本の文化、日本人の考え方が分からないと商売とかできないよ」ということをよく耳にしたからです。このような話を聞いたとき、私は悔しくてなりません。それで、私は日本に留学し、日本のことをもっと知りたいと決意した次第です。



さくら祭り

日本に来て一番驚いたことは、街の清潔さ、そして、街の中の静かさでした。中国ではよく見かけるゴミが日本ではめったにみられず、ゴミ箱もビンや缶、ペットボトル、燃やせるゴミ等にきちんと分類されて設置されていることに驚きました。そして、街中を走る車は割り込みをせず、お互いに譲り合いながら進行しているため、クラクションの音が聞こえませんでした。そのとき、日本人のマナーを尊敬することになりました。このような違いは日本に来ないと分からないのではと思いました。

大学院に進学してから、私は弘前でされる祭り、イベント等に積極的に参加しました。春のさくら祭り、夏のねぶた祭り、秋の菊と紅葉祭り、冬の雪灯籠祭りなどは、いずれも中国では体験できない貴重な経験となりました。それだけでなく、



菊と紅葉祭り

私は弘前大学、岩手大学、秋田大学等三大学の合宿活動、着物の教室、市民との餅作り大会、りんご品評大会、津軽よさこい等にも出席し、このような触れ合いを通して、日本への理解を深めてきました。



ねぶた祭り

私は今経済学を専攻しており、主に日本企業のアウトソーシングについて研究しています。大学で日本語を専攻した私は経済学の基礎が他の学生より弱かったため、倍以上の努力をしなければなりません。辛いときも、泣きたい時も、眠くて起きられない時もありましたが、このような困難を乗り越えて、やっと今は胸を張って「自分は今経済学を専攻している」と言えることができて、とても嬉しいです。



雪灯籠祭り

私は将来日本と中国の架け橋になって、日中両国の貿易を促進するために力を尽くしたいと思っています。人生は辛い時もあれば、諦めたい時などいろいろ大変な時があるかも知れませんが、きっと努力した分だけ結果がついてくるということを胸に刻んで、これからも頑張っていきたいと思います。

平成27年度 東北地区大学体育大会を 開催

平成27年度東北地区大学体育大会は、東北地区大学体育連盟加盟の47大学が参加して、5月29日～11月1日の日程で15の競技種目が開催されました。

弘前大学を主管大学として、弓道（5月29日～31日）が弘前市青森県武道館金の弓道場で18大学218名、バスケットボール（6月26日～28日）が弘前市民体育館、スポーツプラザ藤崎で24大学609名の参加を得て、開催しました。どちらの競技とも、各競技場で熱戦が繰り上げられました。



弘前大学 「教育に関する表彰式」 を実施

去る8月7日（金）、「教育に関して優れた業績を上げた教員」の表彰式を、附属図書館2階グループラーニングルームにおいて、引き続き「優秀な成績を修めた学生」の表彰式を、同3階グループラーニングルームにおいて行いました。

表彰式には、各学部等から推薦された教員6名中5名、学生26名中22名が出席し、伊藤教育担当理事・副学長をはじめ各学部長・研究科長が見守る中、佐藤学長から一人ひとりに表彰状と副賞が贈呈されました。

また、学長から祝辞とともに今後の活躍を期待する旨の励ましの言葉があり、これを受けて、教員を代表して医学研究科の中澤満教授から、学生を代表して人文学部3年の橋本拓也さんから謝辞とこれからの飛躍を誓う決意が述べられました。

第7回 学生生活実態調査のまとめ

本学では、学生の生活実態を把握し、大学として自己点検評価並びに今後の福利厚生施設等の改善、修学支援充実を図るための基礎資料を得ることを目的に、4年ごとに学生生活実態調査を過去7回行っております。昨年が第7回の調査年にあっており、学生生活実態調査専門委員会が学内に組織され、本委員会においてアンケート調査の方法と質問内容が検討され、昨年10月1日～15日の期間に調査が実施されました。

今回の調査では、紙媒体の調査票を配布・回収する従来の調査方法に替わり、インターネット上で質問に回答するWeb入力方式を初めて採用しました。このWeb入力方式への変更は、前回調査で回答者からWeb上での調査を望む声が多く寄せられていたことと、総合情報処理センターの全面的な協力によって実現したものです。

本調査集計結果は、今年3月に報告書を刊行し、本学ホームページに掲載しております。

<http://www.hirosaki-u.ac.jp/wordpress2014/wp-content/uploads/2015/02/sokuho7-2.pdf>

本稿では、学園だより172号において掲載された「第6回学生生活実態調査のまとめ」において取り上げられている事項を踏襲し、掲載することとします。

※第1回調査データが欠如していますので、ご了承ください。

まずは、過去における調査に対する学部生の回答状況を見てみましょう。

第4回までは本学学生の4～5割を対象としたサンプリング調査でしたが、第5回以降は全学生を対象とした調査となっています。第3回

までは、50%以上の回答率となっていました。第4回以降は、第5回を除き30%に満たない回答率ではあるものの、第7回調査においては、Web入力方式としたことが功を奏したこともあり、若干ではありますが、回答率の上昇となっています。

なお、第7回調査では回答を途中でやめたままの未完了者の比率が11%であったことから、未完了者が全て完了できていれば、40%弱の回答率に達することになり、より多くの学生の声を集めることができました。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
回答率	72.0%	56.3%	26.6%	39.0%	21.0%	27.4%

次に、大学への進学理由や弘前大学への志望理由をみてみましょう。

進学理由では、「専門知識や技術の修得」といった本質的な理由の割合が他の理由に比べ高い状況となっています。

本学への志望理由では、「国立大学（法人）だ

から」といった理由の割合が他の理由に比べ高い状況となっています。

本学が第一志望であったか、との問いに対しても「はい」「いいえ」がほぼ半々です。これらの回答の割合は、第2回から第7回の調査であまり変化していません。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
大学進学の志望理由						
専門知識や技術の修得	61.9%	64.5%	63.3%	63.5%	59.9%	65.5%
教養の修得	45.2%	40.7%	44.4%	43.6%	43.8%	42.0%
資格取得	38.7%	35.9%	46.9%	44.4%	35.0%	40.1%
学問研究	27.1%	34.7%	43.1%	42.7%	48.3%	51.4%
学歴取得	27.2%	23.8%	35.6%	43.5%	46.6%	49.3%
弘前大学の志望理由						
国立大学（法人）		85.6%	79.1%	73.7%	76.8%	76.4%
志望する専攻分野	44.8%	43.6%	58.5%	58.5%	62.1%	65.6%
能力・学力に合致	42.4%	40.7%	49.0%	49.6%	50.4%	48.4%
弘前大学は第一志望か						
はい		51.2%	53.6%	52.7%	52.6%	50.8%
いいえ		48.5%	45.8%	46.6%	47.4%	49.2%

続いて、授業への出席状況、満足度、学習時間をみてみましょう。

出席状況については、第4回～第7回の全てにおいて「すべて出席」「ほとんど出席」を合算すると9割以上となっており、授業への出席に対して真摯な態度である事が伺えます。

欠席理由の2項目の割合が低下傾向であること、授業の満足度について、「非常に満足している」「まあまあ満足している」を合算した割合が増加傾向であること、また授業が難しくついていけない科目が「ある」とした割合が低下し

たことが見てとれます。これらはFD（ファカルティ・デベロップメント）活動の義務化や、単位制度の実質化・教育方法の改善・成績評価の厳格化への対応を本学教員が様々な工夫をして取り組んだ結果であると考えられます。

授業以外の学習・研究時間について、「1時間以上」の割合が増加傾向であることの背景には、単位取得にあたっては授業時間以外に予習復習の学習時間が必要であるという単位制度の啓発が実ったものと伺えます。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
授業への出席状況						
すべて出席			30.3%	40.4%	39.4%	49.8%
ほとんど出席			59.7%	53.6%	55.6%	47.2%
半分くらい出席			5.6%	2.4%	2.7%	1.6%
ほとんど出席していない			2.8%	1.8%	1.2%	0.9%
まったく出席していない			1.1%	1.4%	1.1%	0.5%
欠席理由						
授業がつまらない	46.4%	42.4%	19.0%	8.8%	9.2%	5.4%
勉強の意欲がわからない	25.0%	25.5%	11.8%	5.6%	6.4%	4.2%
授業についての満足度						
非常に満足している	1.4%		6.1%	7.6%	10.0%	16.3%
まあまあ満足している	37.8%		61.8%	69.5%	75.1%	71.5%
あまり満足していない	51.1%		28.5%	18.2%	12.1%	11.0%
まったく満足していない	9.6%		1.9%	3.2%	2.7%	1.2%
授業で難しくついていけないものがあるか						
ない		61.8%	41.1%	39.6%	38.8%	55.1%
ある		36.4%	57.1%	58.6%	61.2%	44.9%
授業以外の学習・研究時間（1日何時間？）						
3時間以上	10.6%	4.0%	7.3%	6.2%	6.4%	17.0%
2時間～3時間未満	12.8%	5.6%	8.7%	10.9%	13.1%	20.4%
1時間～2時間未満	22.0%	14.4%	26.8%	22.3%	27.2%	39.0%
30分～1時間未満	21.7%	19.7%	19.8%	18.8%	20.6%	13.8%
30分未満	32.6%	55.7%	36.9%	41.5%	32.6%	9.8%

続いて、奨学金受給や授業料免除の状況を見てみましょう。

奨学金を受けている学生、授業料免除を受けている学生の割合は、ともに増加傾向にあります。

また、授業料のおもな出所は、親が他の出所に比べ突出していますが、割合そのものは減少しており、それを補填する形で奨学金を充てていると伺えます。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
奨学金の受給や授業料免除						
奨学金を受けている	29.2%	30.4%	42.6%	51.8%	57.5%	61.4%
授業料免除を受けている	8.0%	10.4%	6.3%	10.4%	11.5%	14.0%
授業料のおもな出所						
親			78.3%	75.3%	75.4%	69.6%
奨学金			11.3%	17.8%	21.1%	20.7%

卒業後の進路をどのように考えているのか見てみましょう。

就職を考えている学生、大学院進学を考えている学生の割合は、ほぼ一定のまま推移してい

ます。希望職種も大きく変化した傾向は見られません。ただ、教育職の低下については、教員採用数が関東圏を除き依然として低いことが影響しているものと伺えます。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
あなたの卒業後の進路						
就職			73.2%	77.1%	81.2%	81.1%
本学大学院など	18.4%	27.0%	4.4%	4.4%	5.4%	5.1%
希望職業は？						
民間企業	18.0%	24.0%	14.4%	23.8%	27.5%	26.3%
公務員・公的機関	23.5%	33.0%	24.5%	19.2%	25.8%	24.9%
教育職	25.8%	20.2%	21.6%	17.0%	17.0%	11.6%
専門職	13.8%	10.6%	24.3%	26.7%	20.0%	27.6%

最後に、大学への意見や不満・要望などを入力してもらう自由記述欄を設けたところ、多くの声が寄せられました。これらの「弘大生の声」は、きわめて多種多様で、学生はもとより教職員にも深く考えさせられるものが多く含まれておりました。

記述内容により便宜上、(1)大学の組織や教員・職員に関するもの、(2)大学教育に関するもの、(3)進路と経済状況に関するもの、(4)大学の環境・施設や学生生活に関するもの、(5)本アンケート調査に関する意見、その他、の5つに分類し、これらの「弘大生の声」を精査し、今後の大学改革や学生生活の環境改善に役立てたいと考えております。

の、(3)進路と経済状況に関するもの、(4)大学の環境・施設や学生生活に関するもの、(5)本アンケート調査に関する意見、その他、の5つに分類し、これらの「弘大生の声」を精査し、今後の大学改革や学生生活の環境改善に役立てたいと考えております。

(文責：学生課学生支援グループ)

ここ10年ぐらい続いてきた学内の増改築工事もやっと終わりつつある。キャンパスを見渡すと、確かに真新しい建物や教室が小綺麗に整備され耐震強度も大丈夫なはずである...本号ではその様子の一部の紹介である。

おまけに学内の組織も大きく変わり、次年度からは教養教育が地域重視のカリキュラムに移行する。しかし、この様な学内・大学における変化はまだ可愛いものかもしれない。

例えば日本では、物価は安くなったものの雇用は不

編集
後記

安定になり所得は大きく低下するなど、戦後に構築した社会システムの機能不全状態である。各企業・組織とも努力はしているが、今後の日本全体において厳しい事だけは確かである。さらには世界各地ではテロ事件が多発し、国家対非国家、と国という概念自身が液状化しているようにもみえる。

考えてみれば、人間は長き歴史の中でこれを延々と繰り返してきた。目の前の出来事はその一断面ではあるが、いつもそれぞれが社会・歴史の真っ直中なのだろう。ん～？、ちょっと妄想・暴走気味か... (松)

2014年～2015年

弘大生の病気・事故等による給付補償金は

2,947万円

でした。

この一年は延べ 452 名の弘前大学生が病気や事故、盗難などのアクシデントに見舞われ、加入している共済あるいは保険から補償されています。

その内容を、大学生協の学生総合共済（以下生協共済）と学生教育研究災害傷害保険（以下学研災）の給付実績をもとにまとめました。※学研災は生協が大学より業務委託を受けて事務を代行しています

【2014年11月～2015年10月の給付件数と給付金額】

項目	生協共済		学研災	合計	
	給付件数	昨年比	給付件数	給付件数	給付金額
病気入院・手術	78件	± 0	0件	78件	672万円
事故入院・手術	54件	+16	0件	54件	373万円
事故通院・固定具	242件	+80	3件	245人	985万円
後遺障害	0件	▲ 3	0件	0件	0万円
本人死亡	0件	▲ 2	0件	0件	0万円
盗難・借家人等賠償等	12件	▲ 5	0件	12件	167万円
扶養者死亡・見舞金	24件	+9	0件	24件	750万円
合計	449人	+101	3人	452人	2,947万円

弘大生の約9割が、学生総合共済に加入しています

●弘前大学生協からのお願いです

自分の回りの友達などで入院をしたり、けがをしたりした方がいたら、「共済の相談いった？」と声をかけてあげてください。

●給付の申請手続きは生協店舗で簡単にできます

なんといっても共済の良さは、「学内で簡単に手続きができる」ところです。入院や、けがなどをしたらまずは、生協店舗に気軽に相談に来て下さい！（※申請時に診療の領収証が必要になりますので、必ず保管しておいてください。）



【学生総合共済窓口店舗】

(文京地区) SHAREA たび Shop tel0172-37-6480
 (本町地区) 生協医学店 FERIO tel0172-35-3275

給付事例

●部活中のけがで 50,000 円給付

ハンドボール部の練習中、ボールを投げる時肩に痛みがでた。（通院 25 日）

●本人のコメント

今回のケガの治療では予想以上に費用が多く、共済金という制度のおかげで本当に助かりました。ありがとうございました。



●食堂(Horest)入口に設置されている給付ボードで、毎月の特徴的な病気・事故や給付内容を掲示し、予防を呼びかけています。ボードは生協学生委員会が中心となって毎月作成しています。ぜひご覧ください。

弘前大学生生活協同組合



弘前大学 学園だより
Vol.185



HIROSAKI
UNIVERSITY

国立大学法人 弘前大学「学園だより」編集委員会

委員長 荷見 守義 (教育委員会)

委員 細矢 浩志 (人文学部)

山田 史生 (教育学部)

松谷 秀哉 (医学研究科)

工藤 幸清 (保健学研究科)

小菅 正裕 (理工学研究科)

坂元 君年 (農学生命科学部)

澤田 祐子 (学生課)

粕谷 常好 (学生課)

印刷：コロニー印刷